

介詞“对”と複合格助詞「に対して」

—「客体」を表す用法を中心に—

裴麗

大学院生

広島大学大学院国際協力研究科

東広島市鏡山1-5-1

E-mail: sarnerily@163.com

1. はじめに

市川(1997:266)では、「対象を表す『に対して』の誤用例の中では、(中略)『を』ですませた方がよいところに『に対して』を使っているものが多い」とし、以下のような誤用例が挙げられている⁽¹⁾。

- (1)? (先生に対して) 尊敬する。
 (2)? (その問題に対して) 解決する。
 (3)? (彼に対して) 除名する。

これらの文はいずれも中国語母語話者の誤用例であり、「に対して」を「を」に変えると正しい文になる。

なぜ中国語母語話者は、「に対して」と「を」との使い分けが難しいのであろうか。実はこれは中国語の母語干渉による。中国語には“对老师(很)尊敬(先生を尊敬する)”, “对那个问题(进行)解决(その問題を解決する)”, “对他(进行)除名(彼を除名する)”という言い方があるので、学習者は“对”をそのまま日本語の「に対して」に翻訳して誤用となったのである。

中国語では「先生を尊敬する」という意味を表すとき、“尊敬老师”と“对老师(很)尊敬”という二つの言い方がある。一方日本語では、「先生を尊敬する」という言い方しかない。中国語の“老师”と日本語の「先生」は、いずれも客体⁽²⁾であるが、構文では、それを中国語では語順と介詞の両方で表すことができるが、日本語では格助詞「を」で表さ

なければならない。

しかし、中国語の“对”が表す客体を、日本語で複合格助詞「に対して」が表す場合もある。(4)と(5)では、客体を日本語では「を」だけでなく、「に対して」でも表すことができる。

(4)a对鼻子的治疗, 杏子真的担心起来, 并不仅是口头说说而已。(《情系明天》)

b杏子は、梶の鼻の治療に対して口先きだけでなく、本当に心配していた。

(『あした来る人』)

c杏子は、梶の鼻の治療を口先きだけでなく、本当に心配していた。

(5)a也是物极必反吧, 现在我对“自我表现”这顶帽子一点也不害怕了。(《人啊, 人》)

b物極まれば必ず反す, ということであろう。今の私は「自己表現」というレッテルを少しも恐れない。(『ああ, 人間よ』)

c物極まれば必ず反す, ということであろう。今の私は「自己表現」というレッテルに対して少しも恐れない。

このように、「客体」を表す場合、「对」と「に対して」とが対応する場合もあれば、対応しない場合もある。本稿では、「对」と「に対して」を「客体」を表す用法に絞り、それぞれの性格を考察し、両形式の用法にどんな類似点と相違点が見られるのかを明らかにする。

2. 先行研究とその問題点

2.1. 「客体」を表わす“対”についての先行研究

陈昌来(2002)は、介詞を意味役割によって、“主事介詞”、“客事介詞”、“与事介詞”、“境事介詞”、“凭事介詞”、“因事介詞”、“关事介詞”、“比事介詞”に分け、“対”に“客事介詞”、“与事介詞”、“境事介詞”と“关事介詞”という四つの使い方がありと指摘している⁽³⁾。そして“客事”について、陈昌来(2002)は以下のように述べている。

主事介詞、客事介詞、与事介詞都是句子语义结构中必有語义的成分标记。……主事和客事在抽象句中往往是零介詞标记的語义成分。只有在具体句即动态句、语境句中主事或客事因为某种語用的目的，偏离了正常的、固有的句法位置，从而发生移位，这时主事和客事才有可能由介詞介引，以显化出它们跟動詞之间的原有的語义关系。从这一点来看，主事介詞和客事介詞的使用是有語用目的的，是有一定的語用价值的，正因为如此，主事介詞和客事介詞的使用往往形成一定的特殊句式，如“把”字句，“被”字句，“对”字句等。这些特殊的句式的存在正是因为有一定的語用价值，所以，主事介詞和客事介詞也可以说是語用平面的介詞，有一定的語用功能，也可以称为語用功能介詞。

心理動詞所支配的感事，可以由“对，对于”引导位于動詞前或句首。

(“主事介詞”、“客事介詞”と“与事介詞”はすべて文の意味構造に必須成分の標識である。……主体と客体は抽象の文では普通介詞を使わない意味要素である。具体の文、つまり、動態文、文脈文においてのみ、主体と客体はある語用上の目的で、本来の位置から移動し、動詞とのもとの意味関係を介詞で示すことができる。この点からみると、“主事介詞”と“客事介詞”の使用は語用上の目的があり、語用的な価値がある。だからこそ、“主事介詞”と“客事介詞”を使うことにより、特別な構文が往々になされるのである。例えば、“把”字句、“被”字句、“对”字句など。これらの特別な構文の存在はある語用上の価値があるからこそ、“主事介詞”と“客事介詞”は語用レベルの介詞であり、ある語用機能をもっており、語用機能介詞と称することができる。

心理動詞が支配する“感事”は“对，对于”で示し、

動詞の前あるいは文頭に位置することができる。)

また、陈昌来(2005)では「“对，对于”常可以把受事，感事等从動詞后宾语位置提前到句首作为话题(“对，对于”は客体，“感事”などを動詞の後ろの目的語の位置から文頭に移動し、話題とする。)」と述べている。

刘兵(2003)は、“客体论元”と“客事”⁽⁴⁾について以下のように述べている。

客体论元(accusative argument)是论元结构中述語動詞所支配的客体成分，包括受事论元，结果论元，客事论元，属事论元，止事论元和与事论元。客事论元在句法层面主要是充当句子的宾语，在作宾语的情况下客体论元以語序作为标识手段。

客事(target)是与感事相对应，表示心理或思维活动所影响的客体论元。因此，支配客事论元的主要是表示心理活动的動詞。

客事论元一般出现在“感事论元+述語動詞+客事论元”中宾语的位置上。

客事论元出现在状語的位置上⁽⁵⁾必须由介詞来标识。

客事论元可由介詞“对₁，对于₁”引导出现在句首状語或句中状語的位置上。

(“客体论元”は項構造の中で述語動詞に支配される客体要素であり，“受事论元”，“结果论元”，“客事论元”，“属事论元”，“止事论元”と“与事论元”を含めている。“受事论元”は統語上文の目的語であり，目的語とすると，“受事论元”は語順で示される。

“客事”は“感事”と対応し，心理あるいは思考活動にかかわる客体項である。だから，“客事论元”を支配するのは主に心理活動を表す動詞である。

“客事论元”は一般的に，“感事论元+述語動詞+客事论元”の目的語の位置にある。

“客事论元”は状況語の位置にあるとき，介詞で示されなければならない。

“客事论元”は介詞“对₁，对于₁”で示され，文頭状況語あるいは文中状況語の位置に現れる。)

以上の内容をまとめると，次のことが指摘できる。

- ① “对”は客体を表すことができる。この場合，“对”は語用的な働きを果たす。
- ② 客体を表す“对”句は必須成分である。
- ③ “对”は客体を表すとき，述語は主に心理活動を

表す動詞である。

④ 客体を表す“対”は文頭か文中に位置することができる。

先行研究では、客体を表わす介詞“対”は語用的な働きを果たすと指摘してはいるが、具体的にどんな働きをするかについては明らかにされていない。そして、客体を表わす“対”の述語は主に「心理活動を表わす動詞」と先行研究では指摘しているが、実際には、それだけではなく、他の動詞も客体を表わす“対”と共に起る。この点については、2.1.2節で詳しく述べることにする。

2.2. 「客体」を表わす「に対して」についての先行研究

森山卓郎(1988)は、二格以外に、「を攻撃する」「を援助する」「を怒る」などのヲ格も「に対して」と交替することから、「に対して」の述語動詞は「何かのすでに存在するものに対して、何らかの影響を与えようとする動作」と述べており、「に対して」が一部の「を」と交替できることを初めて指摘した。

佐藤尚子(1989)は、「『～に対して』の用例の中では格のかたちにはいいかえられるものが非常に多い。これは“態度の対象”にも“相手”にもみられ、いいかえられる格にはに格とを格がある」と指摘している。しかし、「『～に対して』で態度の対象をあらわすことができるが、すべての動詞が『～に対して』でいいかえられるわけではない。どれがいいかえられ、どれがいいかえられないかという動詞の分類をしめさなければならないが、まだそこまで調査は進んでいない」とも述べている。

馬小兵(2003)は、「に対して」の用法について、A. 「を」と互換できるタイプ、B. 「に」と互換できるタイプ、C. 他の格助詞と互換不可なタイプ、の三つに分類している。

鄭恵芝(2006)は、馬小兵と同じように、「に対して」の意味・用法を「に」と置き換えできるタイプと、「を」と置き換えできるタイプと、他の格助詞と置き換え不可能なタイプとに三分し、「に対して」と格助詞「を」が置き換え可能なタイプについて、「このタイプの『に対して』は『心的・知的な態度』や『動作の態度』という態度活動が向う『対

象(人や物や事柄)』を表していると言える」と述べている。

このように、一部の「に対して」が「を」と互換できることは先行研究ですでに指摘されているが、具体的にどんな場合「に対して」が「を」と互換できるかについては説明していない。

2.3. “対”と「に対して」の対応関係についての先行研究

中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」について論じた先行研究としては、張麟声(2001)と馬小兵(2003)などがある。

張麟声(2001)は、「中国語を母語とする学習者には『に対して』に用いられている漢字の『对』が自国語表現の中に見られる『对』との同一性によって強く印象付けられています」と述べ、中国語の介詞“对”の母語干渉による「に対して」の語用のパターンを挙げたうえで、その誤用原因を分析した。張麟声(2001)は、“对”と対照するとともに、「にとって→に対して」、「に向って→に対して」、そして「について→に対して」型複合格助詞の誤用を分析したが、「を→に対して」型の誤用については言及していない。

馬小兵(2003)は、介詞“对”を「方向」、「対象目標」、「対処関係」と「関連関係」を表わす用法に分け、それぞれの用法の“对”と「に対して」との対応関係を検討し、そして、「に対して」を「『を』と互換できるタイプ」、「『に』と互換できるタイプ」、そして「他の格助詞と互換不可なタイプ」に分類し、それぞれの用法の「に対して」と“对”との対応関係をも検討している。そして、次のような結論を導いている。

① 介詞“对”と複合格助詞「に対して」との対応関係：

日本語の複合格助詞「に対して」のカバーする範囲は比較的狭く、具体的には

- 「対処関係」の“对”とに対応している。
- 「対象・目標」を表す“对”の中の「述語動詞が非動作性動詞」である場合、それに対応する。
- 「方向」を表す“对”と、「関連関係」を表す“对”とには対応しない。

d. 「対象・目標」を表す“对”の中の「述語動詞が動作動詞」である場合、および“对于(对)……(来说)”が文の実質的な主体を示す場合、それに対応しない。(馬小兵(2003: 41))

②複合格助詞「に対して」と介詞“对”との対応関係:

この三つのタイプの「に対して」には、ほぼ“对”が対応すると見なすことができる。(馬小兵(2003: 32))

しかし、沈衛傑(2009)は、「確かに馬小兵(2003)で指摘されている対応関係には以上の1), 2)⁶⁾の場合、対応する場合が多いが、対応しない場合もある。問題は心理動詞が述語になる場合である」と述べている。そのうえで沈衛傑(2009)は、「対処関係」の“对”には「に対して」だけではなく「を」も対応すること、そして心理動詞「尊敬する」「重視する」「拒絶する」の場合、対象は「に対して」ではなく格助詞「を」をもとりうることを指摘している。

馬小兵(2003)の考察は、“对”に対する分類は意味によるものであるが、「に対して」に対する分類は形式によるものである。そして、馬小兵(2003)には「に対して」の代わりに、「を」が“对”と対応する例もあるが、馬小兵(2003)はそれについて何も説明せず、いきなり「に対して」が「対処関係」を表わす中国語の“对”とに対応すると結論づけている。

本稿では、馬小兵(2003)の視点と違い、“对”の具体的な意味用法ではなく、“对”を「客体」という用法に絞り、同じ「客体」を表わす「に対して」との対応関係を検討することにした。

3. 中国語における考察

3.1. “对”で示される補語の種類

先行研究に見られるように、介詞“对”は「客体」を表わすことができる。そして、“客事介词”は文の意味構造には必須成分の標識である。(陈昌来(2002))したがって、“对”は「客体」を表わす場合、“对”で示される補語は必須成分である。例えば:

(6)金涛说小彬够意思, 对咱们够信任的, 咱们得挨个保证不说出去。(《插队的故事》)

(金濤が小彬は大した奴だ、おれたちをこんなに信用してくれたんだから全員この話を漏らさないと誓わなければならないと言った。(『遙かなる大地』)⁷⁾)

(7)同时她对女同学也并不偏袒, 她认为偏袒女生, 就是重男轻女; 女子也是人, 为什么要人家特别容忍呢, 我们的校长有一次说她“有和男人一样的思路”, 我们都以为这是对她最高的奖辞。(《关于女人》)

(女子学生をえこひいきしない。女の肩をもつのは、むしろ女性蔑視だ、女だって人間だ、どうして甘やかす必要がある、という考えだった。(『女の人について』))

(8)任何集会, 只要在C女士在内, 人数到的总是齐全, 空气也十分融和静穆, 男同学们对她固然敬慕, 女同学们对她也是极其爱戴, 我没有听见一个同学, 对她有过不满的批评。(《关于女人》)

(どんな集会もCさんがいるだけで、欠席者はなく、なごやかで静肅な雰囲気になった。男子学生が彼女にあこがれたのは当然だが、女子学生たちにしても熱烈に崇拜していた。彼女に対する不満を、私は誰からも聞いたことがない。(『女の人について』))

(6)～(8)では、「客体」を表わす“对”が四回現れ、それぞれの述語は「信任」(「信用する」)、「偏袒」(「えこひいきをする」)、「敬慕」(「敬慕する」)と「愛戴」(「敬愛する」)である。中国語では、この四つの動詞はいずれも二項動詞であり、主体を表わす第1行為項⁸⁾と客体を表わす第2行為項⁹⁾が必要である。先行研究からわかるように、「客体」は普通目的語の位置にあるが、介詞“对, 对于”で示され、文頭あるいは文中に位置することもできる。どんな位置にあっても、この“对”で示される補語は客体であるから、必須成分である。

3.2. “对”文の述語

次に、“对”文の述語について考察していく。

先行研究では、“对”が“客事论元”を表すとき、述語は主に心理活動を表す動詞であるとされている。しかし、実際の用例を調べたところ、「客体」

を示す介詞“对”の述語動詞はすべて心理活動とは限らない。(9)と(10)を見てみよう。

(9)a七大人看了她一眼。(七大人は彼女をちらっと見た。)

b七大人对她看了一眼。(七大人は彼女をちらっと見た。)

?c七大人对她看。(七大人は彼女をちらっと見た。)⁽¹⁰⁾

(10)a张三踢了李四一脚。(張三は李四を蹴った。)

b张三对李四踢了一脚。(張三は李四めがけて蹴りをいれた。)

?c张三对李四踢。(張三は李四めがけて蹴りをいれた。)

“对”文に現れる心理活動以外の述語動詞には、“看”(「見る」)、“望”(「見る」)、“观察”(「観察する」)のような視覚活動を表す動詞や、“打”(「打つ」)、“摸”(「触る」)、“踢”(「蹴る」)、“刺”(「刺す」)、“亲”(「キスする」)などのような触れ合い動詞および“骂”(「罵る」)などの呼びかけ動詞がある。これらの動詞はすべて具体的な動作を表すことに加え、動詞の後ろに補語⁽¹¹⁾をつけなければ文が成り立たない動詞である。

では、どうしてこのような動作動詞が介詞“对”と共起できるのだろうか、そしてこれらの動詞は意味上どのような特徴があるのであろうか。(11)を通して、この問題を説明していく。

(11)*a我们对他杀了。(私たちは彼を殺した。)

*b我们对他打伤了。(私たちは彼を殴って傷つけた。)

*c我们对他的头踢破了。(私たちは彼の頭を蹴って傷つけた。)

動詞“杀”(「殺す」)は動作性の強いものであるから、この動作によって対象をなんらかに変化させる。すわなち、動作“杀”によって、“他”は「死んでいる」という状態になるわけである。

“打伤”(「殴って傷つける」)、“踢破”(「蹴って傷つける」)は動詞“打”(「殴る」)、“踢”(「蹴る」)の後ろにそれぞれ結果を表す補語“伤”(「怪我をする」)、“破”(「傷つける」)を加えた複合動詞であり、動詞全体は結果を表す。宋玉柱(1996)では、“我们认为,‘把’字句的语法意义在于特别强调动词所代表的动作对‘把’字介绍的受动成分的处置作用;‘对’字句的语法意义在于提示出非处置性动作的对象”(「“把”文の文法意義は動詞に代表される動作

が“把”で示す客体要素に対する処置作用を特別に強調することにあるが,“对”の文法意義は非処置性動作の対象を示すことにある)」と述べられている。従って、述語動詞は動作性が強くて結果状態の意味合いがある場合,“对”は用いることはできず、介詞“把”が使われる。

視覚活動を表す動詞、呼びかけ動詞と触れ合い動詞はすべて結果状態を伴わない動詞である。視覚活動を表す動詞と呼びかけ動詞は対象に接触がなく、対象に何も変化も呼び起こさず、単なる動作の向かう方向を表している。触れ合いの結びつきについて、奥田靖雄(1983)では、「おおくのぼあい、ふれあいのむすびつきは、物にたいして物理的にはたらきかけて、それを変化させる全過程のうちから、接触の段階あるいは接触のし方だけをとりだして、表現しているといえるのである。このことは、なぐりころす、うちたおす、かみくたく、にぎりつぶす、ひきぬく、うけとめるのようなあわせ動詞の存在が証明してくれる」と述べられている。従って、動作の結果状態を伴う動詞は介詞“对”と共起しない。

述語連語が抽象的な動作を表すときも、「客体」を“对”で示すことができる。ただし、“对”文では、抽象的な動作を表すものは動詞ではなく、名詞である。行為動詞は形式的な動詞であり、具体的な意味がない。典型的な形式動詞には“进行”(「行う」)⁽¹²⁾などがある。

(12)但是,我决不诽谤我的妻子姜静宜。你们暗示我要对她进行诽谤,请原谅,请让我把话说完。(《活动变人形》)

(それにね、私は妻を誹謗などしませんよ。そうしろと暗示なさるが、いや、最後まで言わせてください。(『応報』))

“诽谤”(「誹謗する」)は動詞である場合もあれば、名詞である場合もある。動詞なのか名詞なのかはコンテクストがなければわからない。“我决不诽谤我的妻子姜静宜”(「私は妻を誹謗などしませんよ」)では、“诽谤”(「誹謗する」)は二項動詞であり、主体と客体が必要である。それに対し、“你们暗示我要对她进行诽谤”(「彼女を誹謗しろと暗示なさる」)では、動詞が具体的な意味のない形式動詞“进行”(「行う」)であり、意味上、「客体」“她”(「彼女」)を支配するのは動名詞“诽谤”である。構文では、“她”(「彼女」)は与格であるのに、意味上“她”

『彼女』は動名詞の支配対象であるから、ここでは「客体」と見なすことにする。

このように“誹謗”（「誹謗する」）などは“対”文に現れることができ、以下の特徴がある。

- ①具体的な動作を表さないで、抽象的な動作を表す。
- ②動詞にも、動名詞にもなれる。
- ③動詞である場合、二項動詞である。
- ④動名詞である場合、行為動詞・形式動詞と共に起る。

筆者の実際調査によれば、“対”文に現れる抽象的な動作を表す動名詞には以下のものがある。

評点、分配、讨论、考察、分析、调查、研究、修改、指导、镇压、扫荡、围攻、批评、布置、改造、诽谤、排斥、哀悼、说服教育、劝解、教育、估计、

袭击、复查、观察、采访、清理、侵略、探索、搜查、清除、打击、提示、支援、援助、空袭、惩罚、解决、支持、帮助

このような動名詞が行為動詞・形式動詞と共に起し、“対”文に現れるとき、無標の文より硬いので、日常会話ではあまり使われず、硬い文書に使われる傾向がある。CJCSコーパスに収録された8編の中国語の作品を対象として、「“対”+客体+进行+動名詞」構文の出現頻度を調査してみた。《丹凤眼》、《上海的早晨（上）》、《倾城之恋》、《红高粱》は普通の文学作品であり、あまり硬い表現が使われていないが、《我的父亲邓小平(1)》、《邓小平文选第一卷》、《毛泽东选集第四卷》、《毛泽东传》は政治にかかわる公式的なものであり、文体が硬い。

調査結果は表1の通りである。

表1: 「“対”+客体+进行+動名詞」構文の出現頻度

	丹凤眼	上海的早晨(上)	倾城之恋	红高粱	我的父亲邓小平(1)	邓小平文选第一卷	毛泽东选集第四卷	毛泽东传	計
出現数	0	0	0	2	16	7	3	6	34
出現頻度	0%	0%	0%	5.9%	47%	20.6%	8.9%	17.6%	100%

表1からわかるように、「“対”+客体+进行+動名詞」の構文は普通の文学作品では、全部で2回しか現れず出現頻度は5.9%であるのに対し、公式的な文書では32回も現れ、出現頻度は圧倒的に高く94.1%を占めている。

3.3. 情報構造からみる“対”文とSVO文

3.3.1. 語順による焦点

「客体」を表す場合、中国語では、普通、介詞を使わず語順で表す。(13)と(14)の例を見ておく。

- (13) 那时, 她十分同情我的遭遇, 千方百计要给我另外介绍对象, 重新建立一个家庭。(《人啊, 人》)
 (あのころ私の身の上にとっても同情してくれ、八方手をつくして結婚相手をさがし、もういちど所帯を持たせようとした。(『ああ、人間よ』))
- (14) 道静听他说得恳切, 竟有些同情他的遭遇。(《青春之歌》)

(道静は、かれのこうしたうちあけ話を聞いて、かれの境遇にいくらか同情した。(『青春の歌』))

(13) では、“同情”（「同情する」）は感情を表す他動詞であり、“我的遭遇”（「私の身の上」）は客体である。この場合、中国語では「S（主語）+V（他動詞）+O（目的語）」の語順で文を構成し、客体は目的語として動詞の後ろに位置する。このような語順で客体を表す文は無標である。

客体は語順ではなく、介詞“对”で表すこともある。
 (15) 贺昌就对父亲的遭遇十分同情, 于是把父亲要到总政来当秘书长, 以解脱他的困境。(《我的父亲邓小平》)

(賀昌もそんな父に同情し、父を総政治部秘書長に呼び戻して苦境から脱け出させたのだった。(『わが父・鄧小平』))

(16) 我又看到许多外国人, 其中也有美国人, 对我们很同情。(《毛泽东选集第四卷》)

(わたしはまた、アメリカ人をもふくめて、多

くの外国人がわれわれに大いに共鳴していることを知った。(『毛澤東選集Ⅳ』)

(15), (16) では, “同情”(「同情する」)は(13), (14)と同じように他動詞であるが, それぞれの客体“父亲的遭遇”(「父の境遇」)と“我们”(「われわれ」)は“同情”の目的語ではない。客体は介詞“対”で示し, 述語動詞の前に置かれる。このように客体が語順ではなく介詞で示される文は有標である。

では, 意味解釈の観点からみると, 無標の文と“対”文との間にはどのような相違があるのであるうか。(17)を見てみよう。

(17)a道静有些同情他的遭遇。(道静はかれの境遇にいくらか同情した。)

b道静对他的遭遇有些同情。(道静はかれの境遇にいくらか同情した。)

一見したところ, SVO文である(17a)と“対”文である(17b)は同じことを述べており, 意味的にはほとんど差がないものとみなしても差し支えないように思われる。たしかにある点では, (17a)と(17b)は同じ「意味」をもっていると言えるが, この場合の「意味」とは「知的意味」(cognitive meaning), 「命題的意味」(propositional meaning), あるいは「真理条件」(truth-condition)と呼ばれるものである。(17a)によって正しく記述されうるような状況・事態であれば, (17b)によっても正しく記述されるし, 逆もまたそうである。つまり, (17a)と(17b)は真理条件が等しいのである。

田子内・足立(2005)は, 「真理条件は文の意味の中核をなすものであるが, しかしそれが意味のすべてというわけではない。意味には, 真理条件以外にもさまざまな側面があると考えられる」と指摘している。SVO文と“対”文は, こうした非真理条件的な意味の側面において違いを示す。(17b)の述語“同情”は通常の位置より右に移動し, 文末に置かれている。神尾・高見(1998)によって指摘されている「情報の流れの原則」を以下に示しておく。

情報の流れの原則: 強調ストレスや形態的にマークされた焦点要素を含まない文中の要素は, 通例, より重要でない情報からより重要な情報へと配列される。

(17)が通常の平叙文のイントネーションで発話された場合, (17a)と(17b)の情報構造は(18)のように表すことができる。

(18)a道静有些同情他的遭遇。(道静はかれの境遇に

いくらか同情した。)

S _____ V _____ O
より重要度が高い

b道静对他的遭遇有些同情。(道静はかれの境遇にいくらか同情した。)

S _____ O _____ V
より重要度が高い

「情報の流れの原則」からわかるように, 文末に生じる要素は文中で最も際立った伝達上重要なものと見なされる。すなわち, 文末要素は意味・情動的に焦点として解釈されるのである。これは「文末焦点」(end-focus)と呼ばれる最も一般的な無標の焦点である。

S, V, Oはそれぞれ旧情報か, あるいは新情報か, コンテキストがなければ判断できない。新情報は文全体のこともあるし, 述部(PREDICATE)のこともあるし, 文の最後の要素であることもある。神尾・高見(1998)では, 「たとえば2つの情報とともに聞き手にとって未知(新情報)である場合でも, 一方が他方より重要度がより高いというように言うことができる」と指摘し, 「情報の重要度」という概念を用いた。このように通常の平叙文のイントネーションで発話する場合, “対”文を使うことによって, 動詞が元来の位置から文末へ移動し, 最も重要度の高い情報になる。つまり, (17a)(= (18a))では“他的遭遇”(「彼の境遇」)が重要度が一番高い情報であるが, (17b)(= (18b))では“有些同情”(「いくらか同情した」)となる。発話する時, 話し手の情報伝達の意図によって, “対”文あるいはSVO文が選択される。

3.3.2. アクセントによる焦点⁽¹³⁾

では対比焦点がある場合, どうなるであろうか。情報構造上有標である対比焦点はアクセントを伴って文末以外の要素にも置かれ, 対照・対比という観点から見た場合の新情報を担う。このとき対比される部分は, アクセントとともに, 対比対象も暗示あるいは顕在化される。

(19)她对[我的]⁽¹⁴⁾遭遇十分同情。(彼女は[私の]境遇にとても同情した。)

“我的”(「私の」)は, “他的”(「彼の」)ないし“我的”(「私の」)以外のすべてのものと対比・対照ができる。具体的にどの対象と対比するのは, コ

ンテキストがないとわからない。どの対象であろうと強調されるのは、他の人ではなく“我的”である。“我的”と他の選択肢の間に、“我的”だけが選択され、強調されることになる。このように、アクセントと選択肢が備われば、文のどの部分でも焦点になることができる。(19)は、“她十分同情[我的]遭遇”(彼女は[私の]境遇にとっても同情した)と同じ意味であり、しかも同じニュアンスをもっている。このように“対”文と語順で客体を表す文の間にニュアンスの差はなくなり、強調される部分だけにアクセントを加えれば、“対”文とSVO文は同じ意味になる。

ここで、(18)の例を再び考えてみる。(18a)と(18b)はいずれも対比焦点がないものであり、通常の場合、それぞれの重要度の一番高い情報は“他的遭遇”(「彼の境遇」)と“有些同情”(「いくらか同情した」)である。“他的遭遇”(「彼の境遇」)に対する態度を中心に表現しようとする場合、通常の平叙文のイントネーションでSVO文である“道静有些同情他的遭遇”とは言わずに、“対”を使う“道静对他的遭遇有些同情”と言うのである。“同情”(「同情する」)のところに強調ストレスを置き、“道静有些[同情]他的遭遇”と言っても構わない。このように文の最後の部分だけでなく、どの部分にでもアクセントを加えれば、焦点になれる。アクセントを伴う対比焦点がある文は情報の流れの一般的な原則には従わず、強調ストレスの部分が焦点となる。

4. 日本語における考察

4.1. 「に対して」で示される補語の種類

寺村(1982)では補語を必須度によって、必須補語、準必須補語と副次補語に分け、どのような述語にとっても副次的である補語を14種類あげているが、「～対して」などの複合格助詞で表示されている補語もその中の一つに含まれている。塚本(1991)は複合格助詞の何種類かが、取る述語によっては必須補語と見なすべき場合があると主張し、「に対して」が必須補語を形成する与格「に」と交代できる時、「～に対して」で表示された補語は必須補語であるとしている。

寺村(1982)は、「人やものが、他のものに対して関係をもつ動作、作用、できごとのうち、『働き

かけ』を表すものは、『客体』を表す補語を要求し、その補語は『～ヲ』という形をとる」と述べている。ここで言う「補語」は「必須補語」を指す。

以上からわかるように「を」は「客体」を表すことができる。そして、先行研究も指摘しているように、「に対して」がその「を」と置き換えられる場合がある。「客体」を表す「を」で表示された補語が必須補語であることに異論はないが、「客体」を表す「に対して」が必須補語なのかあるいは副次的な補語なのかについては、本格的な議論はまだない。従って、3.1節では「客体」を表す「に対して」で示される補語の種類について検討することにしたい。

まず、客体を表す「を」を含む(20)を見てみる。(20)直記はそのことを心配したのだ。(『夜歩く』)

「心配する」は二項動詞であり、この動詞にとって必須である補語は「主体」を表す第1行為項「直記は」と「客体」を表す第2行為項「そのことを」である。次に、「に対して」で客体を表す(21)を見ていこう。

(21)杏子は、梶の鼻の治療に対して口先きだけでなく、本当に心配していた。(『あした来る人』)

「心配する」は依然として二項動詞であり、「主体」を表す第1行為項と「客体」を表す第2行為項との二つの補語が必要である。「梶の鼻の治療に対して」は第2行為項として、動詞「心配する」によって強く必要とされている。そのため、複合格助詞「～に対して」で表示された補語は「心配する」としては必須補語と見なさなければならない。

さらに、(22)から(27)を見ていただきたい。

(22)彼女に対して今後どのように処すべきか。

(23)けど秀玉に対しては、心から尊敬せずにはいられないわ。(『青春の歌』)

(24)村人の嘲笑・侮辱に対して平岩は恨んだ。

(<http://gonta13.at.infoseek.co.jp/newpage262.htm>)

(25)電子制御工学科5年の西本淳一さん(20)ら3人に対し、斎藤市長は「クリーンヒットをありがとう。先輩から後輩へ技術を受け継いでほしい」とたたえた。(『朝日新聞』2009年12月09日)

(26)米軍再編に絡む艦載機移転問題を抱える岩国市の福田良彦市長は8日、沖縄・普天間基地移設問題など再編見直しで明確な方針を打ち出さない鳩山内閣に対し「まずは国が方向性を決め、説明責任を果たすべきだ」と批判した。(『朝日

新聞』2009年12月09日)

(27) それほどの旦那様の愛情に対して、なおさら大切に上げてあげるべきですと私は忠告しますと、
… (『改訳 嵐が丘』)

(22) から (24) では、述語動詞はそれぞれ「処する」、「尊敬する」、「恨む」であり、いずれも二項動詞である。これらの二項動詞は普通「を」で第2行為項を示すが、ここではすべてが「に対して(は)」で示されている。「に対して」とその前に来る名詞がなければ、談話構造上、情報伝達が足りないと考えられ、「～に対して」は必須項である。

(25) と (26) は、述語動詞はそれぞれ「たたえる」と「批判する」であり、いずれも三項動詞である。これらの動詞は三項動詞として、通常「～ハ(ガ)～ヲ～ト…」(15) という文型を取るが、ここでは「を」の代わりに「に対して」が使われている。二項動詞であろうと、三項動詞であろうと、ここでの「～に対して」は構文に欠かせない要素であり、必須補語と見なければならぬ。

(27) では、「～に対して」は「大切にする」という動詞連語に関わっている。「～を大切にする」というのが一般的であるが、ここでは「を」ではなく「に対して」が用いられている。上の (22) から (26) と同じように、「～に対して」は「大切にする」の構文に必要な要素であるから、必須補語である。

以上の分析からわかるように、「に対して」が客体を表す「を」に置き換えることができる

対して」は必須補語となる。

4.2. 「に対して」の述語

馬小兵 (2003) の用例調査では「を」と互換できるタイプの「に対して」の述語動詞として、「援助する」、「嫌がる」、「遠慮する」、「思う」、「解釈する」、「懐柔する」、「感謝する」、「勘違いする」、「空襲する」、「警戒する」、「嫌悪する」、「嫉妬する」、「渋る」、「心配する」、「準備する」、「信用する」、「説得する」、「調査する」、「同情する」、「とりなす」、「批判する」、「放任する」、「容赦する」、「喜ぶ」、「評価する」、「知る」などを挙げている。

奥田 (1983) は、を格の名詞と動詞の結び方を「(一) 対象的なむすびつき」と「(二) 状況的なむすびつき」に分けている。対象的なむすびつきを表すを格の名詞と他動詞との組み合わせをさらに「(一) 対象へのはたらきかけをあらわす連語」、「(二) 対象の所有、やりもらい、うりかいをあらわす連語」と「(三) 対象への心理的なかわりをあらわす連語」とに分類し、代表的な動詞を数多く挙げている⁽¹⁶⁾。

筆者は、コーパスやgoogleで客体を表す「に対して」と共起する述語を調べてみた。調査の結果、「に対して」と共起する動詞は「(三) 対象への心理的なかわりをあらわす連語」の述語であることがわかった。具体的な結果を表2にまとめておく。

表2: 「に対して」と共起する述語

	一階下位分類	二階下位分類	述語
心理的なかわり	認識のむすびつき	感性的なむすびつき	
		知的なむすびつき	考える, 心配する, 予測する, 理解する
		発見のむすびつき	
	通達のむすびつき		問う, 感謝する, 忠告する
	態度のむすびつき	感情的な態度のむすびつき	恨む, 尊敬する, 喜ぶ, 軽蔑する, 嫌がる, 信じる, 嫌悪する, 嫉妬する, 愛する, 怖がる
		知的な態度のむすびつき	思う, 考える
		表現的な態度のむすびつき	非難する, 批判する, 表彰する, 称える, 評価する
モーダルな態度のみすびつき	要求的なむすびつき		
	意志的なむすびつき		
内容規定的なむすびつき	体験の内容規定		
	思考の内容規定		
	通達の内容規定		

表Ⅱからわかるように、「に対して」の述語が認識・通達・態度を表す動詞に集中している。そして心理を表す動詞以外に、抽象的な動作を表すものもいくつかある。この種の動詞には次のようなものがある。

援助する、空襲する、準備する、調査する、処理する、調べる。

4.3. 情報構造からみる「を」と「に対して」

4.3.1. 語順による焦点

まず、客体が文中に位置する(28)を見てみよう。

(28)a杏子は、梶の鼻の治療を心配していた。

?b杏子は、梶の鼻の治療に対して心配していた。

日本語の情報構造は中国語などのSVO語順を取る言語と違って、「日本語は、通例、動詞の位置が文末に固定されているので、動詞が旧情報を表す場合は、その直前の要素が文中でもっとも重要な情報を表す」と言われている(神尾・高見(1998:131))。

奥聡(2008)は「情報の流れの原則」を応用し、「日本語では動詞の直前の要素が『焦点核(focus source)』である」と提案している。このようにアクセントによる焦点がないとき、(28a)の焦点を以下のようにとらえることができる。

(29)a杏子は、[梶の鼻の治療を]心配していた。

b杏子は、[梶の鼻の治療を心配していた]。

客体を示す「を」を「に対して」に置き換えても、文の情報構造は変わらない。

(30)?a杏子は、[梶の鼻の治療に対して]心配していた。

?b杏子は、[梶の鼻の治療に対して]心配していた]。

従って、「に対して」の使用はほとんど意味がなく、文の意味にも文構造にも影響しない。このようにわざわざ「を」の代わりに「に対して」を使うのは無意味なことなので、文中に位置する客体を普通「に対して」では表せない。

次に、(31)を見てみよう。

(31)a平岩は村人の嘲笑・侮辱を恨んだ。

?b平岩は村人の嘲笑・侮辱に対して恨んだ。

(31)は(30)と同じように、「に対して」は情報構造の変化に何ら関与しないので、「に対して」で客体を示す文は不自然になる。しかし客体を文頭に

置けば、「に対して」は使えるようになる。

(32)a村人の嘲笑・侮辱を平岩は恨んだ。

b村人の嘲笑・侮辱に対して平岩は恨んだ。

(32b)と(31b)の違いをよく観察すると、(32b)が情報構造の変化に係わることが明らかである。客体を文頭に置くことで、もともとの新情報である客体は旧情報となり、述語の「恨んだ」が新情報の焦点となる。

一方、(32a)は「を」で客体を示す例である。この場合、客体が文頭に置かれ、普通のOSV語順となる。有標の語順は、普通の語順よりも「一手」余分なコストがかかる。余分なコストをかけておきながら、余分なコストをかけない構造と同一の意味解釈を与えるのは経済性の原理に反する(奥聡(2008:74))。従って、(32a)では「村人の嘲笑・侮辱を恨んだ」は焦点解釈の候補として許可されないことになる。つまり、「村人の嘲笑・侮辱を」は焦点要素に含まれない。このように(32a)では、「村人の嘲笑・侮辱を」は焦点要素に含まれないし、「平岩は」は主題として焦点要素に入れるわけにもいかないの、述語動詞「恨む」だけが焦点になる。よって、OSV語順の「を」文は有標であり、客体の位置を変えることで、文の焦点が変わるのである。この場合、「を」を「に対して」に置き換えても差し支えない。なぜかという、文頭に置かれる「を」文も「に対して」文もいずれも有標であり、情報構造の変化につながっているからである。

4.3.2. アクセントによる焦点

アクセントを伴う対比焦点のある(33)と(34)を見てみよう。

(33)a杏子は、梶の鼻の治療を心配していた。

?b杏子は、梶の鼻の治療に対して心配していた。

c杏子は、梶の鼻の治療に対して口先きだけでなく、本当に心配していた。

(『あした来る人』)

(34)aですから、何荊夫を否定すべきではありません。

?bですから、何荊夫に対して否定すべきではありません。

cですから、何荊夫に対しては恐らく軽々に否定すべきではありません。

(『ああ、人間よ』)

(33) と (34) はいずれも述語が修飾語に修飾される文である。(33c) と (34c) を読んでみると、対比焦点があることがすぐわかる。

(35) 杏子は、梶の鼻の治療に対して口先きだけでなく、[本当に]心配していた。

(36) ですから、何荊夫に対しては恐らく[軽々に]否定すべきではありません。

この二つの文はそれぞれ、程度を表す副詞「本当に」と「軽々に」に焦点が位置している。この場合「に対して」は使える。

(37) から (40) を見ていこう。

(37) 女子高生誰もが振り返る美少女であるが、本人まるで自覚なし性格は、基本なにに対しても無関心けれど昂に対しては愛しはじめる。

(38) 未荘のしきたりとして、多少とも人目をひく人物に対しては、軽蔑するより尊敬することになっている。(『呐喊』)

(39) また、わたしは科学技術界の同志の諸君が、ここ数年間にわたり、非常に多くの仕事をしたことに対しても、とても喜んでいる。(『鄧小平文選3』)

(40) 何に対して恨んだのかがさっぱりわからないが、飯のグルコース不足の中でばくたろうは奇跡の戦略を編み出した。(http://www.uraken.net/bato/paleo/paleo3.html)

(37) から (40) は、全部対比・対照のニュアンスがある文である。(37) と (38) では、「に対して」はそれぞれ述語動詞「愛しはじめる」、「尊敬する」に関わっているが、これらの述語はもともと「を」格を取るものである。この場合「を」の代わりに、「に対して」が使われている。(37) と (38) は対比対象が顕在化している例である。(37) では「昂」は「なにも」と対比し、(38) では「軽蔑する」は「尊敬する」と対比する。(39) と (40) も「を」の代わりに、「に対して」が用いられた例である。「に対して」がそれぞれ「喜ぶ」、「恨む」に係わっていることは明らかであるが、「客体」の対比対象が顕在化しておらず、不明瞭であることが(37) と (38) とは違う。(39) では「わたしはいくつかのことを喜ぶこと」が想像でき、「科学技術界の同志の諸君が、ここ数年間にわたり、非常に多くの仕事をしたこと」はその中の一つとしてあげられており、ほかのこととの対比が暗示されている。(40) では、

「に対して」の前にくる名詞が疑問詞である。普通、疑問詞は文の焦点であるので、この「に対して」により、客体をより対比的に強調することができる。

5. 日中対照の観点から見る「対」と「に対して」

5.1. 「対」と「に対して」で示される補語の種類

2.1節と3.1節からわかるように、中国語の介詞「対」であっても、日本語の複合格助詞「に対して」であっても、述語には必要である成分なので、「対」と「に対して」で示される補語はいずれも必須補語である。

5.2. 「対」と「に対して」の述語種類の比較

2.2節と2.3節ではそれぞれ「対」と「に対して」の述語を検討したが、この節では両者を対照的に考察していく。

2.2節で示したように、「対」文の述語は心理活動を表す動詞だけでなく、動作動詞でも可能である。ただし、述語動詞が結果状態の意味合いがある場合、「対」は用いられない。2.3節では「に対して」の述語は、認識・通達・態度を表す動詞、つまりは心理を表す動詞に集中し、それ以外に抽象的な動作を表すものもいくつかあるといった結論を導いた。

まず、「対」文と「に対して」文の主な述語類型を見てみよう。

「対」文の述語は主に心理活動を表す動詞であるが、「に対して」の述語は認識・通達・態度を表す動詞に集中している。認識、通達、態度はいずれも心理活動を表わすものであるから、両者の主な述語類型がほぼ一致すると言える。

(41) a 对鼻子的治疗, 杏子真的担心起来, 并不仅是口头说说而已。(《情系明天》)

b 杏子は、梶の鼻の治療に対して口先きだけでなく、本当に心配していた。(『あした来る人』)

(42) a 对手车, 他不再那么爱惜了。(《骆驼祥子》)

b 車に対して, かつてのようにだいじにはしなかった。

(41a) の述語は「担心」(「心配する」)であり、客体を表わす「対」と共起することができる。(42b) の述語は中国語の「担心」に対応する心理動詞の

「心配する」であり、客体を表わす「に対して」と共起することもできる。(42)も同じように、中国語の「爱惜」(「大事にする」)の客体は“对”で示すことができるし、“爱惜”に対応する日本語の「大事にする」の客体は「に対して」で示すことができる。

このように、「客体」を表わす“对”と「に対して」文の主な述語はいずれも心理活動を表わす動詞であることが明らかである。

次に、心理活動以外の述語を比較して見よう。

(43)a七大人对她看了一眼。(『彷徨』)

b七大人はジロッと彼女を見た。(『彷徨』)

*c七大人はジロッと彼女に対して見た。

“对”は、“看”(「見る」)、“打”(「打つ」)、“骂”(「罵る」)などの結果状態を伴わない具体的な動作を表わす動詞と共起できるが、「に対して」はそれができない。

最後に、抽象的な動作を表すものを見ていこう。

2.2節で「述語連語が抽象的な動作を表すとき、『客体』を“对”で示すことができる。ただし、“对”文では、抽象的な動作を表すものは動詞ではなく、名詞である」と指摘した。このとき中国語では、普通「S+对O+进行+動名詞」の構文となり、“对”文に現れる抽象的な動作を表す動名詞としては、主に以下のものがある。

评点, 分配, 讨论, 考察, 分析, 调查, 研究, 修改, 指导, 镇压, 扫荡, 围攻, 批评, 布置, 改造, 诽谤, 排斥, 哀悼, 说服教育, 劝解, 教育, 估计, 袭击, 复查, 观察, 采访, 清理, 侵略, 探索, 搜查, 清除, 打击, 提示, 支援, 援助, 空袭, 惩罚, 解决, 支持, 帮助

それに対し、日本語の場合、抽象的な動作を表すものは数が少なく、「援助する、空襲する、準備する、調査する、処理する、調べる」といったものしか認められない。

中国語と日本語を比較すれば、数からわかるように、抽象的な動作を表わすとき、“对”の述語の範囲は「に対して」のそれを大幅に上回っている。

以上、心理活動を表す動詞、具体的な動作を表す動詞と抽象的な動作を表す動詞の三つの方面から、“对”文と「に対して」文の述語を比較したが、“对”文の方が述語の範囲が広いことは明らかである。

5.3. 情報構造からみる“对”と「に対して」の異同

5.3.1. 語順による焦点

二つの状況に分けて考察することにした。1つは客体が文頭に移動しない状況であり、もう1つは客体が文頭に移動するときの状況である。

まず、客体が文頭に移動しない状況を考察しよう。

2.3.1節で述べているように、“对”文とSVO文との情報構造は違い、SVO文の焦点は客体にあるが、“对”文の焦点は述語動詞にある。話し手の情報伝達の意図によって、“对”文あるいはSVO文が選択される。

一方日本語では、「を」文であろうと、「に対して」文であろうと、どちらもSOVの語順であり、焦点は客体にある。「に対して」文は情報構造を変えることができず、何ら語用機能もないので、わざわざ「を」の代わりに「に対して」を使うのは完全に無意味である。従って、SOV語順でアクセントによる焦点もないとき、「に対して」で客体を表すことはできない。例えば

(44)a他对老师很尊敬。

*b彼は先生に対して尊敬している。

(45)a他对父亲很崇拜。

*b彼は父親に対して崇拜している。

(44)と(45)に示すように、アクセントによる焦点がない場合、中国語では、“对”を使うことができるのに対し、日本語では、「に対して」を使うことができない。つまり、述語が心理動詞であることは「に対して」が使えることの十分条件ではない。この場合、“对”と「に対して」とは対応しない。

次に、客体が文頭に移動するときの状況を考察しよう。

中国語は典型的な孤立言語として、格標示がないため、主語を認定するのは難しい。また義務的な主題標示も存在しないため、形式的に主題を定めることも難しい。そのような中国語において、「語順」は主題を決定する重要な要素である(益岡(2004: 19))。中国語では、主題は普通文頭に位置する。“对”で示される補語は文頭に移動されることで、話題になる。

日本語は中国語と違い、「は」のような専用の主題形式をもっている。「に対して」句は文頭に置かれるが、話題ではない。この場合、「に対して」句は話題ではないのに、旧情報ではある。つまり、

「に対して」句は文頭に移動することで旧情報を提示することができる。このとき、もともと新情報である客体が「に対して」で示され、文頭に置かれることによって旧情報となり、文の情報構造が変わる。「に対して」は情報構造の変化に影響するため、「を」の代わりに使うことができる。

話題であっても、旧情報であっても、客体が文頭に移動する場合，“対”も「に対して」も両方とも使えるから、両者は対応する。例えば

(46) a村人の嘲笑・侮辱に対して平岩は恨んだ。

b对于村民的嘲笑和侮辱，平岩怨恨不已。

(47) a对于内战的危险，他们有足够清醒的估计。

(《我的父亲邓小平》)

b内战的危险に対して，彼らは大変冷静に予測していた。(『わが父・鄧小平』)

(46), (47) からわかるように、アクセントによる焦点がない文では、客体が文頭に位置する場合，“対”と「に対して」とは対応している。

このように、客体が文頭に移動しない場合，“対”と「に対して」とは対応しないが、客体が文頭に移動するとき，“対”と「に対して」とは対応している。

5.3.2. アクセントによる焦点

2.3.2節からわかるように、アクセントによる焦点があるとき、中国語はSVO文と“対”文の両方が使える。他の選択肢と対比する部分だけに強調ストレスを置けば、SVO文と“対”文とは意味もニュアンスもほぼ同じになる。

3.3.2節で考察したように日本語では、アクセント

による焦点がある場合、「に対して」は客体を表すことができる。

したがって、対比焦点がある場合，“対”と「に対して」とは対応している。例えば

(48) a杏子は、梶の鼻の治療に対して口先きだけでなく、[本当に]心配していた。

b对鼻子的治疗，杏子[真的]担心起来，并不仅是口头说说而已。

(49) a他[只对李老师]尊敬。(他の人を尊敬しないことが暗示されている。)

b彼は[李先生に対して]だけ尊敬している。

(48) では、日本語の文は「本当に」に強調ストレスを置き、「口先」と対比する。中国語の文でも，“真的”（「本当に」）に強調ストレスを置き，“口头”（「口先」）と対比する。この場合，“対”と「に対して」は対応している。(49a) では、他の人ではなく，“李老师”（「李先生」）を強調するから、対比焦点が存在する。この場合も，“対”と「に対して」は対応する。

以上述べたように、アクセントによる焦点があれば，“対”とも「に対して」とも「客体」を表わすことができるから、両者は対応する。

5.4. 使用頻度

筆者は介詞“対”と複合格助詞「に対して」の例をコーパス⁽¹⁷⁾からそれぞれ200例取りだし、「客体」を表すものを計量的に分析した。調査結果を表3にまとめておく。

表3: 「客体」を表す介詞“対”と複合格助詞「に対して」の出現頻度

	「客体」を表す“対”	「客体」を表す「に対して」
出現数	26	5
出現頻度	13%	2.5%

表Ⅲからわかるように、「客体」を表わす介詞“対”の出現頻度は「客体」を表わす複合格助詞「に対して」を大幅に上回っている。その理由は以下のように解釈できるであろう。

①「客体」を表す“対”の述語範囲はそもそも「に対して」より広い。

②文にアクセントによる焦点がある場合，“対”

も「に対して」も使えるが、文に語順による焦点しかない場合，“対”文は文頭文中にかかわりなく使えるのに対し、「に対して」は文頭にある場合にだけ使える。この点からみると、「に対して」は“対”よりかなり使用範囲が広いと言えよう。

6. まとめ

以上、「客体」を表す介詞“対”と複合格助詞「に対して」の異同について見てきたが、その異同点をまとめると、次のようになる。

1. 「客体」を表わす時、介詞“対”で示される補語も、複合格助詞「に対して」で示される補語も必須補語である。
2. 述語の種類において、介詞“対”は心理動詞、具体的な動作を表わす動詞、そして抽象的な動作を表わすものと共起できる。それに対し、複合格助詞「に対して」は心理動詞とは共起できるが、具体的な動作を表わす動詞

とは共起できない。そして、抽象的な動作を表わす動詞とは共起できるが、“対”より非常に数が少ない。

3. 文に語順による焦点しかない場合、客体が文中に位置する時には、介詞“対”が使えるのに対し、複合格助詞「に対して」は使えない。一方、客体が文頭に位置する時には、“対”も「に対して」も両方とも使える。
4. 文にアクセントによる焦点がある場合、介詞“対”も複合格助詞「に対して」も両方使うことができる。

以上の内容を表4にまとめておく。

表4：「客体」を表す介詞“対”と複合格助詞「に対して」の異同

		介詞“対”	複合格助詞「に対して」
示される補語が必須補語である		○	○
述語種類	心理動詞	○	○
	具体的な動作を表わす動詞	○	×
	抽象的な動作を表わすもの	○	○ (ただし、数は少ない)
語順による焦点	客体が文中に位置する時	○	×
	客体が文頭に位置する時	○	○
点焦るよにトンセクア		○	○

謝辞：本稿の執筆にあたり、指導教官の佐藤暢治先生から貴重なご教示を賜りました。なお、論文投稿の際、本誌査読者の先生方から有益なコメント

を沢山いただきました。記して、深甚なる謝意を表したいと思います。言うまでもなく、本稿における誤りはすべて筆者の責任である。

注

- (1) 例文の番号は市川(1997)の番号と違い、本稿の順番に応じて変えた。以下も同様である。
- (2) 中国語では“客事”といい、一般的に目的語の位置にある。“客事介詞”で示され、目的語の位置から移動することもできる。詳細は陈昌来(2002:68-72)を参照されたい。日本語の「客体」については、寺村(1982)に詳しい説明がある。寺村(1982)は「日本語の文法としては、そのどこかに、動作・作用を表す動詞の中に、対象の存在を前提とするものがあり、それにはまた『～ヲ～する』となるもの、『～ニ～する』となるもの、『～ト～する』となるものの三種があること、さらに会ウのように補語が『～ニ』とも『～ト』ともなるものがある、ということを書き述べる必要がある。『対象』を、『～ヲ』『～ニ』『～ト』のどれをとるかによって三つに下位分類をするということもあってよいだろう」と述べ、さらに「人やものが、他のものに対して関係をもつ動作、作用、できごとのうち、『働きかけ』を表わすものは、『客体』を表わす補語を要求し、その補語は『～ヲ』という形をとる。これは顕在的特徴であるが、この種の動詞は、もう一つ、潜在的特徴として、『客体』のYを主役にとり立てて、つまり『～が』の形にして、いわゆる直接受身の文に転じることができる」と「客体」を定義している。詳細は寺村(1982:87-91)を参照されたい。
- (3) 詳細は陈昌来(2002)を参照されたい。
- (4) 刘兵(2003)で言及された“客事”、“感事”の概念は、陈昌来(2002)のそれとは異なる。“客事”は陈昌来(2002)の“感事”に相当し、述語が心理活動を表すときにだけ、目的語の位置にあるものを“客事”と定義している。
- (5) 刘兵(2003)は語順ではなく介詞で示す客体は全部“状語的位置上「状況語の位置」”という言葉を使っているが、これは目的語の位置と対照するために使う言葉であり、「状況語」という意味ではない。
- (6) 沈衛傑(2009)では原文とは異なり「1), 2)」が使われている。本稿では原文通り「a, b)」を使う。
- (7) ()の中の日本語の訳文は中国語と対照するために挙げたものではなく、中国語を理解させるための補助的なものである。
- (8) 「行為項」は、述語が文を形成するのに必要な要素で

ある。行為項以外に副次的な「状況項」がある。これは動詞述語の示す過程が展開されるとき、場所、様態やその他の状況を表す機能をもっている(小泉2007:116)。行為項が「必須補語」、状況項が「副次補語」に相当する。

- (9) 伝統文法などでは、第1行為項が「主語」、第2行為項が「直接目的語」、第3行為項が「間接目的語」に相当する(小泉2007:113)。
- (10) 例文のあたりに付した*は、その文は非文法的であること、?は不自然であることを示す。中国語の原文に*あるいは?が付いた場合、()の中の日本語の訳文は「直訳」ではなく、中国語の意味を酌みとって訳した自然の日本語である。
- (11) 于康(2006:142)では、「動詞などの後ろに置いてその成分を補う成分を、中国語では『補語』と言い、補語には結果補語、様態補語、程度補語、方向補語、可能補語、数量補語がある」と論じている。
- (12) “进行”のほかに、“作”、“加以”などの形式動詞もある。本稿では、これらのものを“进行”の同義語として扱っている。
- (13) 対比焦点と言われることもある。
- (14) 本稿では、焦点を[]で示す。
- (15) 小泉(2007:288)を参照されたい。
- (16) 奥田(1983)は(一)対象へのはたらきかけをあらわす連語、(二)対象の所有、やりもらい、うりかきをあらわす連語と(三)対象への心理的なかわりをあらわす連語をそれぞれもっと細かく分類している。対象へのはたらきかけは、(一)物にたいするはたらきかけ、(二)人にたいするはたらきかけ、(三)事にたいするはたらきかけという三つの下位グループに分けて、さらに、物にたいするはたらきかけを表す連語を(a)もようがえ、(b)とりつけ、(c)とりはずし、(d)うつしかえ、(e)ふれあいと(f)結果的なむすびつきに、人にたいするはたらきかけを表す連語を(a)生理的な状態変化、(b)空間的な位置変化、(c)心理的な状態変化と(d)社会的な状態変化に、事にたいするはたらきかけを表す連語を(a)変化のむすびつきと(b)出現のむすびつきに分けている。所有のむすびつきを表す連語を(a)やりもらいと(b)ものもちに分けている。
- (17) 中国語の例は《北京大学汉语语言学研究中心现代汉语语料库》から、日本語の例は『角川文庫』(572作品)から取り出した。

参考文献

- 市川保子 (1997), 『日本語誤用例文小辞典』, 凡人社。
- 于康 (2006), 第3節日本語と中国語, 多和田真一郎編『講座・日本語教育学 第6巻 言語の体系と構造』, スリーエーネットワーク, 141-155。
- 奥聡 (2008), 言語能力と一般認知能力との相互関係生成文法の試み, 『北海道英語英文学』53,41-77。
- 奥田靖雄 (1983), を格の名詞と動詞とのくみあわせ, 『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房, 21-149。
- 神尾昭雄・高見健一 (1998), 『談話と情報構造』, 研究社出版。
- 小泉保 (2007), 『日本語の格と句型結合価値理論にもとづく新提案』, 大修館書店。
- 佐藤尚子 (1989), 現代日本語の後置詞の機能—「～について」と「～に対して」を例として—, 『横浜国大言語研究』7,35-44。
- 沈衛傑 (2009), 中国語話者の作文に出現した「に対して」の誤用分析, 『一橋大学留学生センター紀要』12,41-57。
- 田子内健介・足立公也 (2005), 『右方移動と焦点化』, 研究社。
- 張麟生 (2001), 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例—』, スリーエーネットワーク。
- 塚本秀樹 (1991), 日本語における複合格助詞について, 『日本語学』10 (3), 78-95。
- 鄭惠芝 (2006), 複合格助詞「に対して」の意味・用法の分析, 『일어일문학』30,77-92。寺村秀夫 (1982), 『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版。
- 仁田義雄 (1993), 『日本語の格をめぐって』, くろしお出版。
- 馬小兵 (2003), 中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」, 『文学部紀要』第16 (2), 64-107。
- 益岡隆志 (2004), 『主題の対照』, くろしお出版。
- 森山卓郎 (1988), 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院。
- 山下明昭・山内博之・島多麻美 (1994), 「に対して」の文法的機能, 『国語と教育』18,16-25。
- 陈昌来 (2002), 『介词与介引功能』, 安徽教育出版社。
- 陈昌来 (2005), 现代汉语介词的语用功能分析, 『广播电视大学学报 (哲学社会科学版)』2005年第2期, 46-49。
- 傅雨贤他 (1997), 『现代汉语介词研究』, 中山大学出版社。
- 李宝伦・潘海华・徐烈炯 (2003), 对焦点敏感的结构及焦点的语义解释 (上), 『当代语言学』第5卷2003年第1期, 1-11。
- 李宝伦・潘海华・徐烈炯 (2003), 对焦点敏感的结构及焦点的语义解释 (下), 『当代语言学』第5卷2003年第2期, 108-119。
- 李晓琪 (2003), 『现代汉语虚词手册』, 北京大学出版社。
- 刘兵 (2003), 现代汉语介词标识功能研究, 山东大学博士学位论文, 53-62。
- 刘月华他 (1983), 『实用现代汉语语法』, 外语教学与研究出版社。
- 吕叔湘 (1980), 『现代汉语八百词』, 商务出版社。
- 宋玉柱 (1996), 把字句对字句连字句的比较研究, 『现代汉语语法论集』, 北京语言学院出版社, 20-57。
- 徐烈炯・刘丹青 (2003), 『话题与焦点新论』, 上海教育出版社。
- 徐烈炯・潘海华 (2005), 『焦点的结构和意义的研究』, 外语教学与研究出版社。
- 周士宏 (2009), 试论对比话题与对比焦点, 『黑龙江社会科学』1,130-132。

Abstract

A Study on the Chinese Preposition “dui” and the Japanese Compound Case Particle “nitaishite”

– Focusing on the Use as the Object Marker –

PEI Li

Graduate Student

Graduate School for International Development and Cooperation

Hiroshima University

1-5-1 Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, Hiroshima, 739-8529 Japan

E-mail: sarnerily@163.com

This article discusses the differences between the Chinese preposition “dui” and the Japanese compound case particle “nitaishite” on the use as the object marker. The result of the research reveals that the differences are to be found in the following manners:

1. The scope of predicate of “dui” is wider than that of “nitaishite”.
2. When the focus is decided by word order, no matter whether the object is at the beginning of the sentence or not, “dui” can be used. When the focus is decided by word order and the object is at the beginning of the sentence, “nitaishite” can be used, but when the focus is decided by word order and the object is in the middle of the sentence, “nitaishite” can not be used.
3. When the focus is decided by accent, we can either use the Chinese preposition “dui” and the Japanese compound case particle “nitaishite” to show the object.